

2019年7月14日

福音書からのメッセージ

律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

(ルカによる福音書 10 章 37 節)

ある人がエルサレムからエリコに下っていく途中で、追いはぎにあいました。イエス様の時代の話ですから、それほど珍しいことではなかったと思います。多分人通りもそれほどなかったのでしょう。追いはぎにあった人は倒れていました。そこに三人の人が通っていきます。一人は祭司、一人はレビ人、そしてもう一人はサマリア人です。わたしたちはこう聞いても、その違いがよく分からないかもしれません。しかし当時の人たちにとっては、とても身近な名前でした。

祭司は神殿で仕事をしている人です。そしてレビ人は、その祭司の手助けをする人。つまり祭司もレビ人も、神殿に仕えるような人です。人々にとってエルサレム神殿は神聖なものでした。ですから彼らのような人たちは、人々の模範になるような生活をしていると思われていたかもしれません。しかし祭司もレビ人も、倒れた人を見ると道の向こう側を通って行きます。少し同情的に言うと、彼らには追いはぎにあった人を助けられない理由がありました。神殿で働く彼らにとって、「清い」こと、つまり「けがれ」から身を離すということは、何にも増して大切なことでした。死体に触れたり血に触れたりすることで、彼らは「けがれる」とされていました。真面目に神さまの掟に従おうとするからこそ、彼らは目を伏せたのです。祭司とレビ人のことを批判するのは簡単です。しかし自分のことを第一に考える彼らと、わたしたちは違うと言い切れるでしょうか。

イエス様のたとえ話に出てくる三人目



の人は、サマリア人でした。イエス様の周りで話を聞いていたユダヤ人と、憎しみ合っていた人たちです。その敵対しているはずの人が、倒れている人を介抱し、宿屋に連れ

ていったのです。このサマリア人のようになりたい、心からそう思います。しかしそうもいかないのが現実です。わたしたちは日常の中で、様々な出会いをしています。そのときに、追いはぎにあつてまではなくとも、ボロボロになり、打ちひしがれ、明日どころか今日生きていくことも困難な人もいます。そんなときに、わたしたちはどうするのでしょうか。自分の持っているもの、財産も時間も労力を差し出し、その人のために尽くすのでしょうか。それとも目を伏せて、遠くを歩くのでしょうか。

イエス様は、隣人を愛するとはどういうことかを語られました。そしてわたしたちのために、十字架につけられました。それはわたしたちが傷つき、倒れたときに、近くに来て手を取り、「大丈夫か」と声を掛け抱きかかえて歩くためです。つまり、イエス様はわたしたちの隣人になり、わたしたちを愛して下さったのです。

そして命じられます。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

わたしたちは何をすべきでしょうか。

桃山基督教会

〒612-8039

京都市伏見区御香宮門前町 184

TEL/Fax 075-611-2790

メール momoyama.kyoto@nssk.org

<教会ホームページ>

<http://momoyama.hannari.com/>